

論文審査の要旨

| | | | | |
|--|------------------|-------|-----|--------|
| 報告番号 | 保研 第 21 号 | | 氏名 | 池田 由里子 |
| 審査委員 | 主 査 | 窪田 正大 | | |
| | 副 査 | 木佐貫 彰 | 副 査 | 築瀬 誠 |
| | 副 査 | 大重 匡 | 副 査 | 大渡 昭彦 |
| <p>Instrumental Activities of Daily Living: The Processes Involved in and Performance of These Activities by Japanese Community-Dwelling older Adults with Subjective Memory Complaints</p> <p>手段的日常生活行為：日本における主観的もの忘れを自覚する地域在住高齢者の各生活行為と工程</p> <p>【緒言】 主観的もの忘れ (SMC) は認知症発症の予測因子の1つとされる。SMCの段階から複雑なIADLが低下する可能性が示唆されている。生活行為工程分析表 (PADA-D) は生活行為の障害を工程レベルで分析可能なADI評価表である。本研究の目的は地域在住高齢者におけるSMCの有無がIADL自立度に関連するか否かについて、PADA-Dにて具体的なIADL種目や工程レベルでその特徴を明らかにすることである。</p> <p>【対象】 無作為選択したコープかごしまの60歳以上の組合員2,000人に自記式質問紙を送付し、621名から回答を得た (回収率31%)。回答者621名のうち、もの忘れの自覚の有無について回答し、調査内容に不備のなかった270名を分析対象 (SMC (+) 群137名, SMC (-) 群133名) とした。</p> <p>【方法】 対象者は生活健忘チェックリスト (EMC) に回答後、SMCの有無に回答した。さらに、基本情報・PADA-DのIADL8行為に関して回答した。結果は対応のないt検定、カイ2乗検定、Mann-Whitney検定を使用し2群間比較した。本研究は鹿児島大学医学部疫学研究等倫理委員会の承認を得て実施した。</p> <p>【結果】 EMC合計得点はSMC (+) 群がSMC (-) 群に比し有意に高値であった。PADA-DのIADL8行為について、SMC (+) 群はSMC (-) に比し電話・買物・調理・家事・金銭管理・服薬管理において有意に低値であった。PADA-DのIADL5工程について、SMC (+) 群はSMC (-) に比し40工程中27工程で自立している者が有意に少なかった。</p> <p>【考察】 SMCのある地域在住高齢者は遂行機能、working memory、情報処理能力など高度な認知機能を必要とする複雑な生活行為の低下が明らかとなった。また、生活行為を細分化し工程別に検討した結果、日常生活の様々な場面で道具の使用・操作、物品管理、道具の選択、モニタリングの制限が示唆された。その背景には短期記憶・展望記憶・遂行機能・分配性注意が関連していることが考えられた。</p> <p>【結論】 SMCのある高齢者が地域生活を継続するためには、生活行為を詳細に分析し、低下している工程に対する具体的な支援が必要であると考えられる。</p> <p>審査の結果、5名の審査委員は、本論文は、主観的もの忘れのある地域在住高齢者の生活行為を詳細に分析し新規的な知見を示したものであることから、博士 (保健学) の学位論文としての価値を十分に有すると判定した。</p> | | | | |